

## 三番瀬評価委員会小委員会（自然環境調査関係）検討結果報告

### 18年度調査結果に基づく三番瀬全体の評価の検討

#### 1 検討の趣旨

##### (1) 三番瀬再生会議からの検討指示

第19回三番瀬再生会議において「18年度調査結果に基づく三番瀬全体の評価」について、検討指示が出された。

##### (2) 検討の視点

- ・平成18年度調査結果において、過去の調査と比較して変動が大きいと思われる事項についての検討
- ・平成20年度以降の調査の進め方について
- ・台風等のイベント時におけるモニタリングのあり方について

#### 2 評価委員会及び小委員会における検討状況

##### (1) 第4回三番瀬評価委員会

平成19年8月3日（金）

県から、平成18年度三番瀬自然環境調査結果、平成19年度三番瀬自然環境調査事業の概要及び平成20年度以降の三番瀬自然環境調査事業の概要についての説明を受けた。

以後、自然環境調査に係る小委員会を設けて検討を行うこととした。

##### (2) 三番瀬評価委員会小委員会（自然環境調査関係）

平成19年9月25日（火）

県から、平成18年度三番瀬自然環境調査結果を評価するに当たってのポイントについて説明を受け、調査結果の評価についての検討を行った。

また、台風9号による江戸川放水路からの出水があったため、台風等のイベント時におけるモニタリングのあり方について検討を行った。

##### (3) 三番瀬評価委員会小委員会（自然環境調査関係）懇談会

平成19年10月23日（火）

前回に引き続き、調査結果の評価について検討を行った。

また、平成20年度以降の調査の進め方について検討を行った。

##### (4) 第5回三番瀬評価委員会

平成19年11月19日（月）

### 3 検討結果

#### (1) 評価結果

小委員会では、平成18年度の調査結果と平成7年から8年を中心に実施した補足調査、平成14年度調査との結果の比較を行い、変動があったと思われる以下の4つのポイントを中心に検討を行った。

##### 底質調査結果

市川航路周辺の浅海域や塩浜護岸前面付近で、補足調査や平成14年度調査と比較すると、平成18年度調査では、中央粒径が小さくなり、シルト・粘土分が高い値を示すなど、変動が見られたこと。

##### 底生生物調査（平均個体数）

補足調査と比較すると、平成14年度調査や平成18年度調査では、平均個体数の値が小さくなっていること。

##### 底生生物調査（湿重量）

補足調査や平成14年度調査の値と比較すると、平成18年度調査では、底生生物の湿重量が、特に春季・夏季において、数値が小さくなっていること。

##### 底生生物調査（群集組成の類似度）

群集組成の類似度による海域区分では、猫実川河口周辺において、平成14年度調査で主要種であったウミゴマツボやニホンドロソコエビに変わり、平成18年度調査では、コケゴカイ、ミズヒキゴカイ、イトゴカイ科が高い構成比を示したこと。

その結果、県から報告のあった4項目については、以下の指摘がなされ、より詳細な分析が必要であるとの結論に至った。

については、流況の変化等との関係、あるいはシルト・粘土分の動態の検討などが必要。

及びについては、環境に関する諸データとの関係の検討（特に種毎の詳細な分析）、台風やアオサの異常発生との関係の検討などが必要。またカキ礁についての取扱いの検討の必要性の指摘もあった。

については、猫実川の水環境との関係についてさらに検討が必要。

なお、これら以外の重要な変化に関する指摘はなかった。

また、三番瀬全体の環境の変化については、以下のとおりまとめられた。

- ・現在の調査結果及び結果の解析状況からは、三番瀬の自然環境に何らかの大きな変化があったのか、観察された変動が過去の変動の範囲内なのかどうかの判断を下すことはできない。
- ・今後、利用可能な全てのデータを用いた分析を進めることが必要であり、さらに平成19年度以降の調査結果とあわせた解析（最終的には22年度の総合解析）で重要な変動であるかの最終結論を出すことになるであろう。

#### (2) 今後実施することが必要な事項

小委員会では、三番瀬の自然環境の把握に向けて、以下に掲げる事項を実施することが必要であるとの結論に至った。

また、これらにより、三番瀬の自然環境に大きな変化が起きていると認められた場合は、追加調査を要請する。

- ・三番瀬自然環境調査については、平成20年度も引き続き「三番瀬自然環境調査年次計画」（別表1）にしたがって実施すること。  
なお、各調査の設計やとりまとめにおいては、これまでの評価委員会、小委員会における検討などを活かしていくものとする。
- ・重要種・主要種についての種ごとの分析や底質の変化の分析を行うこと。また、生物とその生息環境の変化について、相互の関連性や変化の要因の検討を行うこと。  
また、他機関が実施した調査結果等を収集・整理し、検討を加えること。

### （3）実施体制

三番瀬における調査の立案、実施、取りまとめには、データの解析ができる専門家が日常的に取り組むことにより、県及びその委託先の適切な作業を支えていく必要がある。この作業には、膨大な時間と労力が必要であり、現在の委員会体制では、これに対応することは不可能である。他方、三番瀬再生事業は進行中であり、また調査データも毎年蓄積されている。そのため、それらに対応した有効な結論を出すためには、これを可能にする体制の整備が緊急の課題である。

### （4）その他

台風等による大雨時の江戸川放水路からの放水や、アオサ類の異常発生の影響の把握については、三番瀬自然環境調査とは別の枠組みで取り組むべきものと考え、三番瀬の自然環境に大きな影響を与えるものであることから、関係機関からの情報を収集した上で、継続して議論を行っていく必要がある。

以上

(別表 1)

### 三番瀬自然環境調査年次計画

調査名	調査項目	地点数	実施年度					備考
			18	19	20	21	22	
底生生物調査	種の同定、個体数、湿重量、殻長等	60地点程度						評価委員会の評価
水質調査	水温、塩分、pH、溶存酸素、クロロフィルa	10地点程度						底生生物調査時に実施
底質調査	酸化還元電位、粒度組成、強熱減量等	60地点程度						底生生物調査時に実施
魚類着底状況調査	種の同定、個体数、湿重量、体長等	11地点						
鳥類経年調査	種の同定、個体数等	15地点						
スズガモ等 消化管内容物調査	食性							10月1日から実施予定 カワウの食性についても実施
鳥類行動別個体数調査	種の同定、個体数、出現位置、行動状況	5地点						
定点撮影		5地点						他の調査と併せて実施
深浅測量	水深	測線間隔50m						
水環境モニタリング	水温、塩分、溶存酸素、クロロフィル、濁度、流向・流速等	3地点						
中層大型底生生物	生息孔の分布等	40地点						
藻類調査	種の同定等	40地点						
付着生物調査	種の同定、個体数、湿重量、空間分布等							
空中撮影								大潮干潮晴天時に実施
総合解析								

————→ は、評価委員会による評価